

新収蔵品を中心とする 女性画家展

2024 年 6 月 10 日（月）～ 8 月 3 日（土）
実践女子大学香雪記念資料館 下田歌子記念室

伊藤小坡（1877-1968）

伊勢にある猿田彦神社宮司の家に生まれる。名は佐登。18 歳のころ、郷里の磯部百鱗（1836-1906）に絵を学び、のちに京都に出て森川曾文（1847-1902）に師事する。明治 36 年（1903）、第 5 回内国勸業博覧会に《伊賀局》を出品。明治 34 年、谷口香嶠（1864-1915）門下となり「小坡」と号する。明治 38 年、同門の伊藤鷺城と結婚。大正 4 年（1915）、第 9 回文部省美術展覧会出品《製作の前》が初入選で三等を受賞。師亡き後、小坡は女性たちの日常生活を描いて新機軸を打ち出し、文展、帝国美術院展などの官展で活躍をする。昭和 3 年（1928）、竹内栖鳳（1864-1942）門下になると、歴史風俗や古典文学をテーマとした気品ある女性像を展開した。

《早春》では、和歌集を手にする女性が、ふと視線を上げ梅の花に目をやる様子が描かれる。小坡が描く、読み物と女性を扱った作品としては《つゞきもの》（第 10 回文展）がよく知られている。同作は、同時代の女性の日常を捉えたものだった。これに対し本作では、紅梅の花と着飾った女性を描いており、日常から切り離されたような華やかな女性像が表されている。本作は、その主題や表現から、栖鳳門下となった昭和期以降の作と考えられる。（M）

【主要参考文献】

桑名市博物館編『京都画壇を代表する女性画家 伊藤小坡—まなざしにみちびかれ—』（桑名市博物館、2019 年）

No.1 2023 年度新収蔵品

早春

昭和時代
絹本着色、1 幅
51.2 × 56.6cm
款記「小坡」
印章「佐止」（朱文長方印）
共箱：蓋表に自題「早春」
蓋裏「小坡題」、
「小坡」の朱文方印



《早春》

島 成園（1892-1970）

大阪府堺市熊野東 3 丁に生まれる。戸籍上は母・千賀の実家の遊廓の大茶屋である「成田屋」の養女で、本名は諏訪成栄。町絵師の父・島栄吉と図案家の兄・市治郎（雅号は御風）から絵を学ぶ。北野恒富の美人画からも学んだと考えられる。大正元年（1912）第 6 回文展で《宗右衛門町の夕》が初入選し、中央画壇にデビュー。大正 5 年には、「女四人の会」の展覧会を岡本更園、吉岡千種（木谷千種）、松本華羊と開く。大正 7 年に会員である大阪茶話会の第 1 回試作展に出品の《無題》や大正 9 年の第 2 回帝展で出品・入選した《伽羅の薫》は、美人が描かれるだけの形式的な美人画とは異なり内面を表現した女性像であった。大正 9 年末、銀行員の森本豊治郎と結婚後、豊治郎が上海支店へ転勤となると成園は上海と大阪を行き来した。この頃、異国文化を画題にとりあげた作品などを制作。昭和 21 年（1946）豊治郎の退職を機に帰阪。

《住吉詣》は、住吉大社で授かった正月の縁起物「住吉踊」を右手に持ち、画面の左を向き斜め上を見て立っている女性が描かれた

作品である。女性は前帯に揚帽子をかぶり、江戸時代後期頃の中年の既婚女性が外出する際の装いをしている。江戸時代の風俗を題材にしており、背景にある縁台の端には杖、小さい茶碗なども描かれ、女性が住吉詣後に茶屋へ訪れた場面が表されている。（N）

【主要参考文献】

大阪中之島美術館・産経新聞社編『決定版！女性画家たちの大阪』（大阪中之島美術館、2023 年 12 月）
小川知子『島成園と浪華の女性画家』（東方出版、2006 年 9 月）

No.2

夕涼

20 世紀前半
絹本着色、1 幅
119.2 × 27.8cm
款記「成園」
印章「成園女史」（朱文方印）
共箱：蓋表に自題「住吉詣」
蓋裏「成園」、「成」「園」の朱文印連印

No.3 2023 年度新収蔵品

住吉詣

20 世紀
絹本着色、1 幅
85.9 × 41.9cm
款記「成園」
印章「成」（朱文方印）
共箱：蓋表に自題「住吉詣」
蓋裏「成園」、「成園」の朱文方印



《住吉詣》

No.7

夕霧

（『大近松全集』第 10 巻附録）

大正 12 年（1923）
紙・木版多色摺、1 枚
38.5 × 27.5cm
款記「成園」

No.9

新浮世絵美人合 七月

ゆあがり

大正 7 年（1918）
紙・木版多色摺、1 枚
38.6 × 24.4cm
款記「成園」

跡見玉枝（1858-1943）

跡見勝造の娘で名を勝子。父方の従姉にあたる跡見花蹊に京都で絵の手ほどきを受け、のちに長谷川玉峰（1822-79）や望月玉泉（1834-1913）に師事する。そのほか、漢籍や書法を宮原節庵（1806-1885）、和歌や桜花の描法を宮崎（桜戸）玉緒（1828-96）らに学んだ。明治 11 年（1878）には京都女学校及女紅場の図画教員を務め、その後京都府画学校に兼勤した。明治 15 年、第 1 回内国絵画共進会に出品したのをはじめ展覧会に出品を重ね、明治 19 年にアーネスト・フェノロサ（1853-1908）の講演を聞いたことを契機に本格的に画家を目指して上京した。上京後は花蹊が開設した跡見女学校や共立女子職業学校、成立学舎女子部などで図画の教師をしつつ、日本美術協会展覧会、明治 26 年のシカゴ・コロンプス世界博覧会や明治 33 年のパリ万国博覧会など、多くの展覧会に出品し、褒賞も受けている。また、明治期より私塾「精華会」を開設し、多くの門下生を育てるとともに内親王御用掛を務めた。

《桜花双鳩》は、桜の枝の下で灰と白、二羽の鳩が仲良く寄り添う姿が描かれている。桜花図の名手として名を馳せ、花鳥画を得意とした玉枝の典型的な作品の一つである。また古来邪氣払いの神として信仰された鍾馗を描いた本作では、粗い筆致で衣を描き、眈をつり上げて上方を睨み付ける険しい表情、そして、筋張った腕によって勇ましさを強調する。対照的に髪や髭などは丁寧かつ繊細に描き込まれ、巧みな表現力がうかがえる。（Y）

【主要参考文献】

跡見学園女子大学花蹊記念資料館編『跡見学園女子大学花蹊記念資料館 令和五年度企画展 没後80年 跡見玉枝』(跡見学園女子大学花蹊記念資料館、2023年)
跡見家編『桜乃我か世』(跡見家、1931年)

No.4 2023年度新収蔵品

おう か そうきゅう

桜下双鳩

19世紀後半～20世紀前半
絹本着色、1幅
109.1×34.3cm
款記「玉枝女史」
印章「跡見玉枝」(白文方印)



《桜花双鳩》

No.5 2023年度新収蔵品

しょう き

鍾馗

明治37年(1904)
絹本着色、1幅
99.6×41.8cm
款記「明治三十七年五月 玉枝勝寫」
印章「跡見玉枝」(白文方印)



《鍾馗》

上村松園 (1875-1949)

京都府下京区の葉茶屋の家に生まれる。名は津禰。明治20年(1887)、京都府画学校に入学し鈴木松年(1848-1918)に学ぶ。翌年、松年が退職すると自身も画学校をやめ松年塾に入門、「松園」の号を授かる。明治23年、第3回内国勸業博覧会出品《四季美人図》が訪日中の英国皇子A. コンノートに買上げられて注目される。明治26年、シカゴ・コロンブス世界博覧会出品《四季美人図》を出品。同年、幸野樸嶺(1844-95)に師事する。樸嶺の死後、竹内栖鳳(1864-1942)に学ぶ。明治40年、第1回文部省美術展覧会に《長夜》を出品し入選、三等を受賞。その後、文展において入選と受賞を重ね、大正5年(1916)、第10回文展《月蝕の宵》を出品、同

展における推薦・永久無鑑査となる。昭和11年(1936)、文部省美術展覧会招待展出品《序の舞》が政府買上品となる。昭和16年に帝国芸術院会員、昭和19年には帝室技芸員に任命される。昭和23年、女性として初の文化勲章を受章。京都画壇を代表する画家として活躍した。(M)

【主要参考文献】

名古屋市美術館・中日新聞社編『上村松園展 名古屋市美術館開館25周年記念』(上村松園展実行委員会、2013年)
中村麗子・鶴見香織・小倉実子ほか編『上村松園展』(日本経済新聞社、2010年)

No.6

ゆきおんな

雪女

だいちかまつぜんしゅう

(『大近松全集』第12巻附録)

大正12年(1923)
紙・木版多色摺、1枚
38.5×26.7cm
款記「松園」
印章「松園」(白朱文方印連印)

木谷千種 (1895-1947)

大阪市北区の唐物雑貨商の家に生まれる。名は英子。明治40年(1907)、渡米(1909年帰国)。大正2年(1913)、池田蕉園(1886-1917)に師事。大正4年、北野恒富(1880-1947)、野田九浦(1879-1971)に師事。同年、第9回文部省美術展覧会出品《針供養》が初入選。大正5年、島成園、松本華羊、岡本更園とともに「女四人の会」の展覧会を開催。大正7年、第12回文展に《をんごく》を出品、入選する。同年、竹内栖鳳の紹介で菊池契月(1879-1955)に師事。大正9年、五代竹本義太夫の次男で演劇研究家の木谷蓬吟(1877-1950)と結婚する。同年、第2回帝国美術展覧会出品《女人堂》が入選。以降、第4回帝展《近松戯曲の女二題》、第5回帝展《女人形部屋》等、官展の入選を続け、大阪画壇において活躍をした。また、大正11年、蓬吟が『大近松全集』(全16巻、大近松全集刊行会)の出版を始めた際には、同書の付録木版画(作品No.6, 7, 8)を依頼した日本画家18名のうちの一人として《お千代》を制作した。後進の指導も手掛け、大正9年には自宅に女性を対象とした画塾「八千草会」を開設。同会による、展覧会開催や会員の帝展入選といった活動からは、女性のたしなみとしての絵の手ほどきに留まらず、熱心な絵画指導が行われていた様子がうかがえる。(M)

【主要参考文献】

池田市立歴史民俗資料館編『女性日本画家 木谷千種—その生涯と作品—』(池田市立歴史民俗資料館、2002年)

No.8

ちよ

お千代

だいちかまつぜんしゅう

(『大近松全集』第14巻附録)

大正12年(1923)
紙・木版多色摺、1枚
39.3×26.9cm
款記「千種」
印章「千久さ」(白文橢円印)

[解説リーフレット]

新収蔵品を中心とする女性画家展

発行日：2024年6月10日

編集・発行：実践女子大学香雪記念資料館

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49

<https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>

凡例

- ・本リーフレットは実践女子大学香雪記念資料館で開催した「新収蔵品を中心とする女性画家展」(2024年6月10日～8月3日)に際し、発行したものです。
- ・記載は作家名、作家略歴に続けて、展示番号、新収蔵年度、作品名、制作年代、材質・技法、員数、寸法、款記、印章等を記しました。新収蔵品については略歴に続いて作品解説を記し、画像を掲載しました。
- ・掲載の作品はすべて実践女子大学香雪記念資料館蔵です。
- ・本リーフレットの編集は児島 薫(実践女子大学香雪記念資料館館長)、三國 博子(同学芸員)が担当し、矢野 綾香(同事務職員[学芸事務])、中嶋 真里(同臨時職員[学芸補助])が補助しました。
- ・解説は、三國(M)、矢野(Y)、中嶋(N)が執筆しました。